Bulletion of Kagoshima
Prefectural Archaeological Center

From JOMON NO MORI

No. 13　　CONTENTS

A case of stone producing area at the Simazu family graveyard of the Satsuma domain and a soul grave.
Tadahiro　Kurokawa

About a syone wall Kagoshima castle after Genroku.(2)
Shiro Abiru

Producing area tilea made in Mashiki Town,Kumamoto Prefecture.
Shiro Abiru

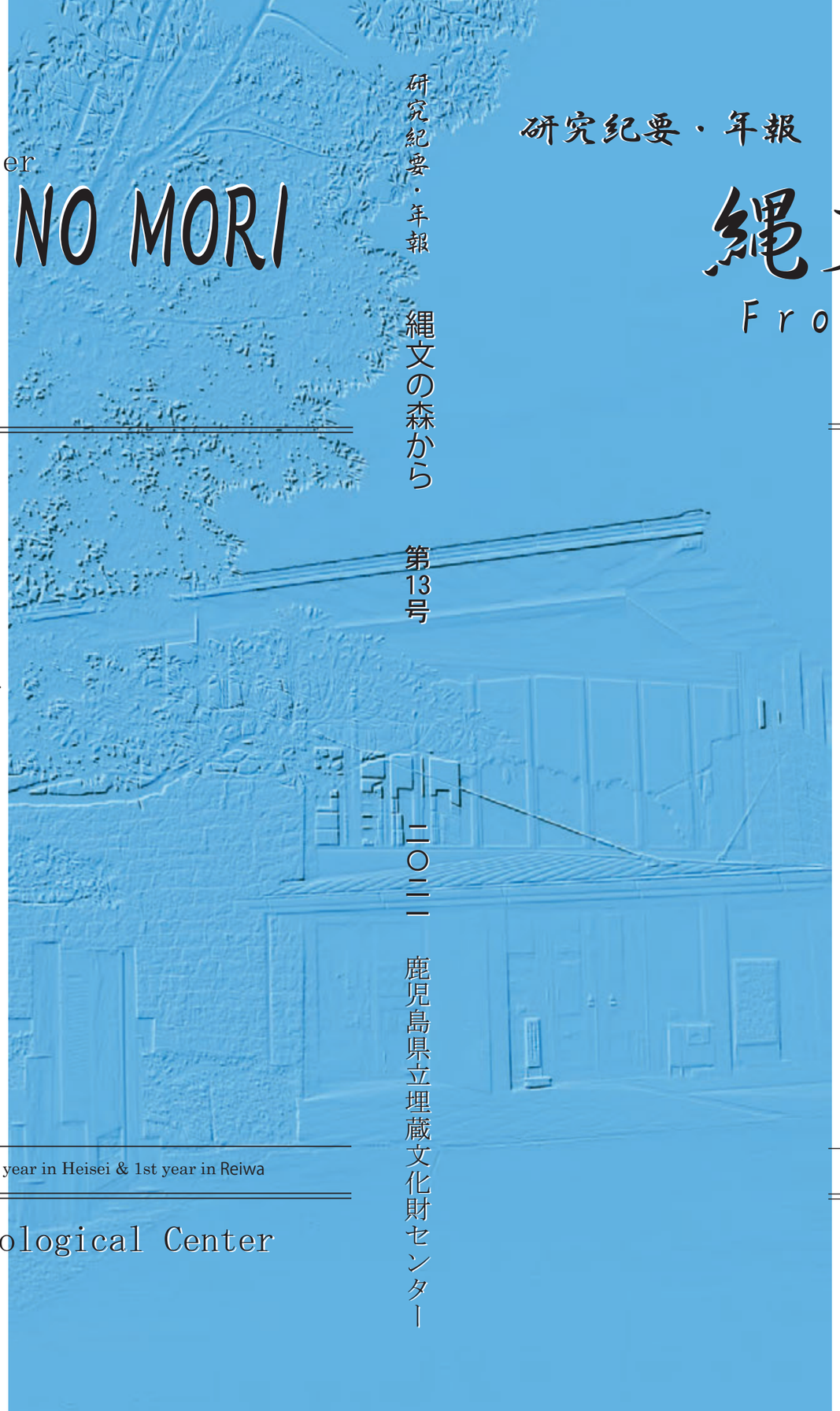
〈Introduction of materials〉
Product made of fang from Euchi Shell mound.

On the Way Class Practice.
Tatsumi Yubasaki

View for the Archaeological Cultural Prorerties Management in Kagoshima Prefecture based on Statistical Data
Kouichirou Mori

Annual of Kagoshima Prefectual Archaeological Center of the 31th year in Heisei & 1st year in Reiwa

Kagoshima Prefectural Archaeological Center
March　2021



研究紀要・年報
縄文の森から
第13号
二〇二一
鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第13号

薩摩藩主島津家墓所における石材産地の一事例と招魂墓
黒川　忠広

鹿児島城跡元禄以降の石垣について（2）
阿比留　士朗

熊本県益城町所在土山瓦生産地について
阿比留　士朗

〈資料紹介〉江内貝塚出土の牙製品

ワクワク考古楽（授業支援）の実践について
湯場﨑　辰巳

統計資料からみる鹿児島県の埋蔵文化財保護の
これまでと今後の展望
森　幸一郎

平成31・令和元年度　年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター
2021.03

『縄文の森から』第 13 号　　目　次

薩摩藩主島津家墓所における石材産地の一事例と招魂墓

黒川　忠広・・・・・1

鹿児島城跡元禄以降の石垣について（２）

阿比留　士朗・・・・・9

熊本県益城町所在土山瓦生産地について

阿比留　士朗・・・・・14

〈資料紹介〉　江内貝塚出土の牙製品

・・・・・19

ワクワク考古楽（授業支援）の実践について

湯場﨑　辰巳・・・・・21

統計資料からみる鹿児島県の埋蔵文化財保護の
これまでと今後の展望

森　幸一郎・・・・・31

平成 31・令和元年度年報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45

熊本県益城町所在土山瓦生産地について

阿比留　士朗

Producing area of tilea made in Mashiki Town, Kumamoto Prefecture

Shiro Abiru

要旨

本稿では、熊本県益城町所在の一大瓦生産地「土山」について，町史をもとにした生産開始年代の推察と現在の土山集落について報告を行った。また、土山で生産された瓦が鹿児島城でも出土したことを確認した。

キーワード　土山瓦，瓦の生産と流通，刻印

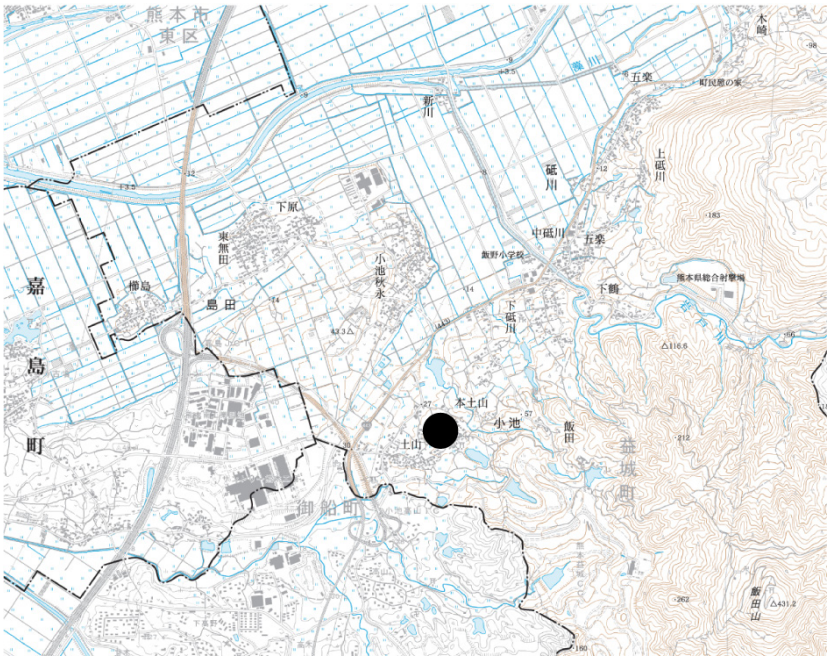
1　益城町史にみる土山瓦

(1) 土山瓦とは

土山は熊本県上益城郡益城町小池内（第１図）に所在し，江戸時代から続く瓦の生産拠点の一つである。土山瓦について『益城町史』（ｐ 683 ～ｐ 694）によると，①『肥後国誌』[1]「上益城郡鯰手永小池村」の項に「瓦師土山村ニテ屋瓦等ツクル」と記事がある。②瓦師は当初，御作事頭の配下に置かれた。しかし，安永７（1778）年に御郡代支配に変わり，天明６（1786）年御用瓦焼方が改正され再び御作事頭の支配下に入るが，文化７（1810）年に再度，御郡代支配となる。③長久寺の過去帳や享保 20（1735）年御作事所御職人御用瓦師に関する記事などから 18 世紀初めから土山で瓦造りが始まったと推定している。④熊本城築城時は小山（熊本市東区小山）で瓦を焼いていたことが天守出土の瓦で知られている。⑤土山瓦師棟梁事蹟の項では各瓦師家（北村，猿渡，福田，坂上，芦原）の初代は加藤清正に瓦師の任命を受けている。以上，町史ではこのように記載されている。

町史記載内容③～⑤から，当初瓦師として各家が小山で瓦生産に従事したが，何かしらの理由によって 18 世紀に入り土山に集約されたとの意味だろうか。

坂上家は当初から土山に居住していたが，福田家の初代は小山に居住していたと記載がある。また，細川家の記録『町在』の記載に小山村瓦師棟梁，福田勘次郎が文化７（1810）年老衰のため死去とある。熊本城では宝暦の銘とともに「小山瓦師勘次郎」銘が刻印された鯱瓦がある（熊本市熊本城調査研究センター 2020）ことから土山福田家は親戚筋など一門であったと思われる。瓦師の土山移転に際して分離されたのであろうか。



第１図　土山位置図

(2) 土山瓦棟梁家

各家の人物については町史に掲載されているので割愛するが，北村家，猿渡家，福田家，坂上家が代々棟梁職を世襲してきた。坂上家以外の八代目北村嘉市，八代目猿渡龍造，五代目福田常衛右門が幕末まで棟梁職として瓦製造に従事した。芦原家については瓦師横目の役であり，特に納入記載もないので以後，芦原家以外の各家について記述する。

町史は文書を基に，各家代々の出自を記載しているが，使用された史料は前出③の史料の他，『在町』（寛政 11 年以降），『覚帳』（宝暦 5 年以降），『在中先祖附－寛政九年閏七月』の江戸中期以降のものや，猿渡家の『先祖附』等である。

江戸時代前半の各家の出自では，初代と二代目，もしくは三代目に年代幅に開きがある。北村家は初代北村与兵衛が加藤清正より扶持を拝領し，瓦師棟梁を拝命する。二代目北村太右衛門については詳細が不明であるが，三代目北村太右衛門は元文 3（1738）年に棟梁職となる。猿渡家は初代猿渡甚左衛門が加藤清正より城内御用瓦師を拝命した。二代目猿渡庄右衛門は享保 20（1735）年死去。三代目猿渡庄右衛門は正徳 5（1715）年前後に棟梁職となり，享保 20 年御作事所職人御用瓦師を拝命する。福田家は初代福田五右衛門が加藤清正より瓦師棟梁を拝命した。二代目福田五右衛門は正徳 3（1713）年に棟梁職を拝命する。坂上家は初代坂上安兵衛が加藤清正と共に肥後に入国し土山に居住し，御用瓦師となる。二代目坂上安兵衛は加藤忠広時代に浪人として過ごし，細川家が入国後再び御用瓦師を務め，三代目坂上仁右衛門のあと四代目坂上仁右衛門の時の享保 9（1724）年に松井求馬の家臣となる。

以上のようにどの家も初代は加藤清正によって御用瓦師や瓦師棟梁に任命されたとしている。このことから 1611 年以前，厳密にいうと熊本城築城期に瓦師として活躍していなければならない。しかし，坂上家以外の二代目，三代目の記録と初代の記録には年代の開きが大きい。

(3) 土山の瓦生産稼働期間

土山の瓦師がいつ頃から生産を開始したのかについては，前述のとおり町史では 18 世紀の初めと推測している。では町史に記載されている瓦納入履歴のうち，納入箇所の記載があるものについて，以下に記載する。

○　三代目北村太右衛門，元文 3（1738）年手取御馬屋作事の節，瓦師共 2 万枚程目板瓦差し上げた内の 2500 枚を差し上げた。

○　四代目北村茂兵衛，宝暦 4（1754）年，落雷破損の天守閣鯱瓦四尾，宝暦 14（1764）年御作事長屋修復の節，目板瓦 6600 枚の内，1600 枚。

○　五代目北村甚次郎，安永 9（1780）年鯰手永櫛島村の御囲籾[2]蔵建方の節，二間梁五間分の瓦一式。寛政 20（1800）年八代城御用瓦 30 万枚程を敷河内村[3]で焼方。

○　三代目猿渡庄右衛門，享保 19（1734）年天守閣鯱瓦。元文 3（1738）年手取御馬屋作事の節，目板瓦 3 万枚。

○　四代目坂上仁右衛門，元文 3（1738）年手取御馬屋作事の節，目板瓦 1000 枚。弟仁平次 500 枚。

以上が町史に記載のある納入箇所と納品数が分かるものである。納品数がわかるのは「寸志」[4]として寄付しているものが多いからである。元文 3 年には万枚数の生産体制が整っている状況であったこと。また，あくまで町史の内容を精査しての判断だが，北村，福田，猿渡家の二代目の記録が薄く，三代目から瓦製造の記録があるので，二代目段階で選地・移転が開始された可能性がある。初代と二代目には何世代か存在し，土山としての記録は二代目からではないだろうか。では二代目のいつ頃の段階で瓦を納品出来るほどの生産力を持ったのかについては，熊本城で「元禄四土山四郎」刻印[5]の瓦が飯田丸地区で出土（熊本市熊本城調査研究センター　2020）しているため，町史が想定している年代より若干早い段階での操業の可能性も考えられる。

ただし，土山での「瓦生産開始」に関しては，具体的な操業開始時期や，生産体制の規模を示す文書がない以上，ある段階で一斉に土山に瓦師が集約された新規集約なのか，少人数の瓦師が瓦生産していた土山に統合集約されたのか判断は出来ない。この判断が出来ない以上，操業時期の判断は消費地出土瓦の層位，紀年銘，胎土分析等に頼ることになり，古い年代を示す土山産瓦が出土する可能性は十分あり得る。しかし，少数の瓦生産場所である土山産か，一大瓦生産地としての土山瓦なのかは歴史的な意味合いもブランド力も大きく異なる。

以上のことから，瓦の一大生産地の土山としての操業開始年代は元禄期から納入記録のある元文 3 年以前の二代目福田，三代目猿渡が棟梁職になる正徳期までの 18 世紀前後の幅で考えた方が良いと現状では考える。

土山の所在する村名は明治時代からの町村合併によって数回の変更がある。明治時代前半の小池村の戸数 228 戸の内，瓦生産家は 50 戸とされる（p 721）。大正時代の飯野村 720 戸の内，85 戸が瓦製造業であった（p 775）とも 56 戸（p 841）であったともされる。昭和の工業状況でも「旧飯野村における瓦製造業を除

いては殆ど見るべきものはなかった」（ｐ 982）とあるように近現代でも一大瓦生産地であった。しかし，昭和 63 年にセメント瓦の普及や原材料の不足などによって土山瓦は終焉を迎えることになった。

2　現地調査結果

(1) 周辺環境

土山が所在する益城町小池は飯田山の麓に位置し，北側は低地の水田地帯となる。土山は本土山，土山の小字名が残り，その小字の前面を囲うような地割が現在，道路となり，後背（山側）には囲うような地割はない。（写真１）。周辺には益城町内でも多数の小規模溜池が点在しており，町史によれば 19 世紀に入り溜池に導水するための隧道掘削を計画したことや，新規溜池の掘削が行われたようで，農業用水の不足をうかがい知る記載もある（ｐ 652，ｐ 721）が，いつの段階で溜池が作られはじめたのかは不明である。また，明治期の状況であるが，計路川が通り，運輸の面では不便がないが，水利は不便で時々旱に苦しむとある。

焼き物を行うにあたっての選地には，土と水，燃料となる木材，輸送面など諸要素を考えて選地するかと思うが，当地では水に関しては弱いと思われる。明治期の農業 155 戸に対しての溜池にしては数が多いように感じることから，瓦生産に対しても使用した溜池と推察したい。

写真１　上空から見た土山集落

(2) 踏査結果（第２図，写真２～７）

土山集落は平成 28 年熊本地震の影響か，新規住宅が多く，現在も分譲中の区画があった。集落内を踏査すると，空き地や道路際に瓦片の散布は一定程度見られる。瓦の時期は不明であるが，銀化している瓦が多いように見受けられる。軒瓦や刻印瓦など時期を検証出来る遺物は確認出来なかった。

瓦の散布状況は前面に地割が残る範囲内の集落に多く確認出来る。特に伍三祇神社は境内に多く散布がみられる。しかし伍三祇神社より山側の耕作地には散布がほとんど見られない。また山から延びる丘陵が急崖となり，その際まで耕作地であることから，丘陵を削り，原材料である粘土を採掘していたと想定出来る。採掘範囲である山側に瓦の散布が少ないのは，採掘作業範囲であったからではなかったのかと考える。

採掘範囲と考える丘陵裾の状況は，耕作土は赤褐色土の粘質が強い土壌である。また，耕作面毎に段差が大きいところもあり，集落に向かって道が数本延びる。椎ノ木池は周囲の耕作面より高く，一見，堤状に見える。

山側で粘土を採掘し，燃料となる木材を切り出し，集落内で製造したと考えたいが，集落内にそのような痕跡がなく，詳細は不明である。土山で瓦生産が開始された段階は達磨窯での焼成と考えられるが，窯体片や廃棄瓦を集積する瓦捨場などの痕跡も確認出来なかった。しかし，これは土山集落の最新の現状を目視した評価である。18 世紀～ 20 世紀末の約 300 年間に継続して，集落内の狭い範囲で瓦を生産していた結果，古い時期の痕跡は消失しているが，それは地上の痕跡であって，地下には廃棄に伴う土坑などが存在する可能性は否定できない。

3　おわりに

肥後細川藩で御用瓦師として瓦の生産を担ってきた土山瓦師や生産地である土山集落は現代まで瓦の生産を行っていることから，江戸期の実態が掴めない。技術的，経営的な断絶，移転がない場合，どの生産遺跡でも古い様相を見出すのは困難であるのと同様，土山も地上には瓦を生産していた痕跡は皆無であった。しかし，坂上家，芦原家の墓石や地蔵尊，太子堂など文化財の多い地区である。

土山瓦は細川家の作事に対し，瓦を多く供給し，熊本城でも刻印瓦が多く出土している。17 世紀後半に作事の件数が増加し，瓦生産が急増した結果，原材料となる粘土，木材の保護なのか，生産枚数の倍増を狙ってなのかまでは分からないが，18 世紀前後に小山から分散する形で土山に生産拠点を設けたと考えたい。

今回は瓦自体の整理・調査は実施せず，町史を中心とした生産遺跡の現状の報告のみであった。今後，土山瓦を整理し，刻印の変化と刻印された瓦の型式を確認することによって，どの時期に，どの範囲まで流通したかを検証する必要があると考える。

ここで注目したいのが、鹿児島城跡出土の刻印瓦に土山瓦印と考えられる平瓦が出土している（鹿児島県立埋蔵文化財センター　2020）。第３図左が鹿児島城跡出土の刻印瓦で，右が熊本城不開門櫓修復の際に拓本され町史に掲載されたものである。印判形状や銘が非常に似ている。町史によるとこの刻印は『覚帳』，『在中先祖附－

寛政九年閏七月』等から福田五右衛門の印[6]であると推測しているので，二代目もしくは三代目福田五右衛門である。鹿児島城跡出土土山刻印瓦と町史掲載の刻印瓦の実物を比較するのは難しい状況[7]であるが，鹿児島城の方でも土山瓦への認識を新たにし，出土時期，出土点数などを精査する必要がある。

鹿児島城では瓦の作事については不明な点が多く，薩摩焼苗代川系の堂平窯で出土した朝鮮系瓦や陶器瓦が使用されていたのではないかとの指摘（鹿児島県立埋蔵文化財センター　2006）もあるが，鹿児島城跡出土瓦の大半は和瓦である。鹿児島城跡出土軒瓦は文様構成が大坂に近い（橘唐草等）と言われているなか，土山刻印の瓦が一定程度出土することが確実となれば，鹿児島城を葺いたであろう瓦の生産・流通（人・物）経路に土山も含めて検証していく必要があるのではないか。

土山地区は埋蔵文化財包蔵地ではない。近世でも非常に地域，広域に重要な遺跡であることから，包蔵地指定を行うのが望ましいが，現状，地上，地下ともに江戸期の痕跡が見出せていない以上，遺跡として評価出来ない。伝統地として地域で大切にされているが，歴史の掘り起しが必要な重要地であると考える。

註

1)　肥後国誌は増補が続いてきた。宝永３（1706）年井沢蟠龍が北島雪山の『国郡一統志』と辛島道珠の『肥後名勝記』を踏まえ 17 巻にまとめた。明和９（1772）年森本一瑞が 25 巻増補する。明治 17（1884）年水島貫之，佐々豊水が森本一瑞の肥後国誌に『阿蘇文書』『新選事蹟通考』など各文書を引用，補入し 14 巻を増補する。

2)　宝暦８（1758）年囲籾制発布

3)　現在の八代市敷川内町か

4)　商人，百姓に寸志として寄付させ，見返りとして苗字帯刀を許す制度。天和３（1683）年にみられ，宝暦元（1751）年に制度化する。金納郷士や寸志御家人と言われる身分の者。また，親の身分資格を継承する際も「継目寸志」が必要であり，瓦師も金銭，現物を寸志として寄贈する。

5)　熊本城出土の刻印瓦うち，「年号＋製作場＋工人名」の刻印瓦では圧倒的に元禄の年号が多い。しかも棟梁職以外の人物名も多い。このことから，この年号が小山と分散された時期に製作年代と，産地が分かるように（品質確認のため）押印されたものか（新規集約の可能性），棟梁職以外の工人名も多いことから小山分散と関係なく当該期の政策から押印したもので，分散以前から土山で操業していた工人名なのか（統合集約の可能性），もしくは各工人の窯場の操業年を表したのか（開業年代の可能性）等の検証が必要である。

6)　熊本城から出土した瓦で土山（福田か？）五右衛門銘の刻印瓦は印判形状，印字形状で相違があるものが確認出来る。福田五右衛門は初代から三代目まで世襲されているが，一世代で複数の刻印を施しているのかは現時点で集成していないため判断は出来ない。

7)　熊本城不開門に戻されたと思われる。その後，不開門は熊本地震で倒壊した。倒壊後の部材保存状況については未確認である。

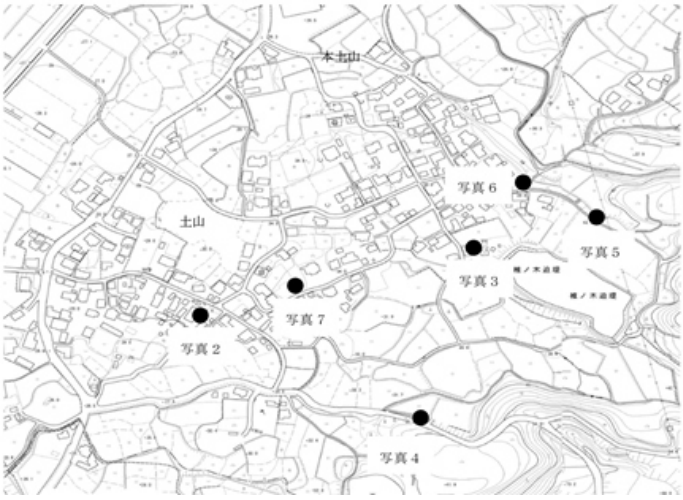
【引用・参考文献】

益城町史編さん委員会編（1990）『益城町史　通史編』益城町

鹿児島県立埋蔵文化財センター編（2006）『堂平窯跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（106）鹿児島県立埋蔵文化財センター

熊本市熊本城調査研究センター編（2020）『特別史跡熊本城跡総括報告書　調査研究編』 第１分冊・第２分冊　熊本市熊本城調査研究センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター編（2020）『鹿児島（鶴丸）城跡 － 御楼門周辺部 － 』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（205） 鹿児島県立埋蔵文化財センター



第２図　現地写真位置図

写真２　土山太子堂

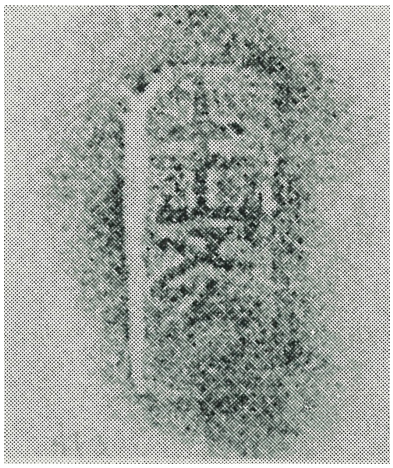
写真３　伍三祇神社

写真４　土山集落南東部から

写真５　切土状況

写真６　瓦散布状況 (1)

写真７　瓦散布状況 (2)



第３図　刻印拓本　左：鹿児島（鶴丸）城跡報告書（2020）　右：町史より転載

鹿児島県立埋蔵文化財センター
研究紀要・年報 縄文の森から 第13号

発行年月　２０２１年3月
編集・発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL　0995-48-5811
E-mail　maibun@jomon-no-mori.jp
URL　https://www.jomon-no-mori.jp
印　　刷　有限会社　国分新生社印刷
〒899-4301　鹿児島県霧島市国分重久627-1